

## 里の子育てから若手世代の生き方を考える

山形県北部、最上川河畔にある清川もようやく春が訪れようとしている。筆者が活動拠点としている最上川学推進センター（旧清川小学校・愛称「歴史の里の館」）では、先月から試験的に地元のお母さんたちによるカフェレストランが開業している。先日そこで出された昼食の天ぷらにフキノトウがあった。いよいよ春を実感させてくれる。清川は周りを最上峡の深い森林と立谷沢の里山で囲まれており、すぐ近くを最上川が流れている。森と川の両面から季節を感じることができ、その恵みを直に暮らしの中に取り入れることができる場所だと言えるだろう。

これからの子どもたちのためには、自然や暮らしの体験という要素が重要だと思う。豊かな自然とそれを利活用した暮らしを内包する東北各地の集落には、子どもたちに対して生きる力を育む潜在的能力を有しているように思われる。

とはいえ、小学校入学後は子どもたちも大人たちもなかなかまとまった時間を取りづらい昨今である。だから里の原体験を積むためにも、就学前の幼児期にいかにして自然や暮らしに存分に接することができるようにするかということを考える。筆者には、もうすぐ一歳を迎える子どもが一人いる。近くの森や川に連れて行く機会が多いが、身近にあるこうした環境こそ大事なのではないかとつくづく思うのである。

清川に事務所を構える NPO 法人里の自然文化共育研究所（以下「里の研究所」）では、「森と水辺のようちえん」と称して新規事業に来年度取り組むことになった。これは未就学児とその保護者を対象に地域の森や川などの自然環境を体験するとともに、そこに根差して暮らす地元の方々とのコミュニケーションを図りながら地域の暮らしを実践的に学んでいくことを企図している。

これまで里の研究所では、小学生以上の子どもたちへの体験学習活動を地元の実践者や活動団体とともに取り組んできたが、それはどうしても学校カリキュラムに合わせた細切れ的なものにならざるを得なかった。里の研究所では保護者も共に学ぶというスタイルを重視しているが、そのためにはまとまった時間が取れることが必須であり、子育ての早い段階で取り組みを行っていききたいということを考えていた。特に保護者の視点は大変重要である。なにしろ（筆者も含めてということになるだろうが）、今の保護者自体が自然や暮らしに対する認知不足、経験不足を指摘されて久しい。保護者もまた子どもたちとともに農山漁村から学び、ライフスタイルを見直していくことを活動の中では求められていくものであり、そうした方向に導いていく必要性を感じるのである。

山形に移り住んで今年で 8 年目、田舎の暮らしや生業が元気であることこそ次の世代の子どもたちのために大切だし、伝えていきたいと願うものも多いと実感するようになった。これはそこに住む村人だけが責任を持つべきものではなく、街の人も同時にかかわってもらいたいものなのである。村のありようは都市との関係性の中で形成されてきたものだ。幼児の保護者とは、実は若手の現役世代がほとんどであり、今、都市部を中心に働いてい

る人たちが大半であろう。だからこそ、幼児期における田舎での原体験をすすめていくことは、若手世代に暮らしの本質的なことを提示し異なる側面から生き方を示していくことにもつながるのではないだろうか。筆者にはそれが東北に生きることの醍醐味の一つだと思うのである。